愛称通りを歩く⑯
万年橋通り

古池や蛙飛びこむ水の音

有名な松尾芭蕉のこの句は、万年橋北詰にあった芭蕉庵の古びた池の様子を詠んだものです。江戸前期の俳人松尾芭蕉は、37歳の冬、この庵に移り住み、ここを起点に全国各地の旅へ出かけていきました。

万年橋通りには芭蕉記念館、芭蕉稲荷神社など、芭蕉ゆかりの地が並びます。

芭蕉記念館から隅田川沿いを南へ下り、芭蕉庵史跡展望庭園へ足を延ばしてみましょう。川を望む芭蕉翁像、流れ行く雲を見つめながら、果てしない旅路を夢見ているようです。川風に吹かれ、細かく裂かれた芭蕉の葉が心地よい音を奏でていました。

時代は移り、江戸中期、寛政の改革を行った松平定信は不時の災害に備えるため、七分積立の制度を設けました。江戸の町費を節約し、その積立てで籾米を購入、現在の常盤1丁目付近にはこの籾蔵が11棟並んでいたそうです。

さて赤穂浪士討ち入りの話は有名ですが、彼等が討ち入りの後、この万年橋を通って泉岳寺に引き揚げたという事実はあまり知られていないかもしれません。

◀万年橋

毎月15日は諸大名が将軍に拝礼する日にあたり、両国橋を通ることによって、大名行列と接触することを避けるため、隅田川東岸を南下し、永代橋を渡ったとか。

万年橋は区内で最も古い橋のひとつ。芭蕉が深川に移り住んだ延宝8年（1680）の江戸絵図には「元番所橋」と記されていますが、これは橋の北岸に舟の往来を監視する場所があったためです。

当時、この橋は船の通航を妨げないように高くかけられ、虹型をした優美な橋の下から富士山を望むことができました。

残念ながら今ではビルに囲まれ、当時の姿を偲ぶことはできませんが、万年橋北詰からの清洲橋の眺めはなかなかのもの。

天高く青空が広がる秋の一日、気持ちよい川風を頬に受け、歴史の足音を聞きながらゆっくり歩いてみませんか。

▲芭蕉稲荷神社